

2013 1/15

No.1938

1月第3・第5火曜日発行

# 政経 かながわ

一般社団法人  
— 神奈川政経懇話会 —



正月競馬恒例となったファンサービスの流鏑馬（やぶさめ）が3日、川崎市川崎区の川崎競馬場で行われ、レース前に大日本弓馬会の武田流一門が馬場を駆け抜け馬上の妙技を披露した。



視点・点描	3
知財活用に大学生が一役	
経 済	4
財政・金融主導の再生戦略 期待裏切れば市場波乱	
政治反射鏡	7
経済、外交で素早い対応 自民党全体で後押し	
国 際	8
高齢化が導いた朴氏勝利 問題山積の中、韓国政権交代	
くらし2013	10
厚生年金基金の廃止	
企業最前線	12
フォークリフト事業統合加速	
広告珍談	14
～うまい物がたり⑥ 恵比寿さまと祝杯	
海外都市事情	15

### 事務局だより

#### ◇横浜定例講演会

2月22日（金）

13時30分～15時

崎陽軒本店

講師は東京大学大学院新領域  
創成科学研究科国際協力学専  
攻教授 戸堂 康之氏

演題は「つながりによる経済  
成長～産業集積とグローバル  
化」

#### ◇神奈川TOPセミナー

3月13日（水）

富士ゼロックス神奈川株式会  
社と共催

ホテル、ニューグランド「レ  
インボーボールルーム」

▽特別講演 15時30分～16  
時30分。講師は元ヤクルト  
スワローズ監督の古田 敦也  
氏、演題は「優柔決断のすす  
め」

▽基調講演 16時40分～17  
時40分。講師は第29代海上  
幕僚長の赤星 慶治氏、演題  
は「日本における周辺情勢」

▽懇親会「神奈川情報交流会」  
17時50分～19時30分、「ペ  
リー来航の間」

# 視点 点描



## 知財活用に大学生が一役

大企業が持つ特許などの知的財

注目を集めそうだ。

産を中小企業に移転して新たな商品開発を支援する川崎市の「知的財産交流会」。2007年から続けられているビジネスマッチングの場に強力な助っ人が登場した。特許を基に実際の商品開発プランを練り上げる大学生たちだ。企画段階から消費者でもある学生の着想を借りる試みは、売れ筋商品を生む新手の「出口戦略」ともいえ、

川崎市によると、市内には大企業の研究機関などが200カ所以上集積。高い技術力を持つ元気なものづくり企業も多い。こうした地域の潜在力に着目した市と公益財団法人市産業振興財団は、富士通、東芝、日本電気など計7社の協力を仰ぎ、大企業から中小企業への知的財産の移転を促す交流会の開催を重ねてきた。大企業の



「知」と中小企業の「技」。その融合は昨年11月末現在で14件のライセンス契約へと実を結んでいる。大企業の特許を市内の中小企業へと移転させる過程で「若い頭脳」を提供したのは多摩区にキャンパスを構える専修大学の学生たち。経済部の遠山浩准教授(中小・ベンチャー企業論)のゼミ生約30人が昨年6月から半年間、富士通の持つ複数の特許と中小企業の技術力を結びつけて魅力ある新商品を生

み出せないかと知恵を絞ってきた。

「成果」は昨年12月9日、富士通川崎工場で中小企業の経営者約20人を前に披露されたII写真。音声をゆっくりと聞き取りやすくする技術を活用した電話や芳香するメガネストッパー…。計6つのプランに耳を傾けた下野毛工業協同組合(高津区)の細谷和彦理事長は「若い人の発想に大いに刺激された」と興味津々の様子。こうした反応にプランを提案した学生も「実用化されたらうれしい」と自信を深めており、専修大生による商品化のプランづくりは今年も継続される見通しだ。

大学生のアイデアが将来、市内のものづくりの中小企業の手によって世に送り出される日も、そう遠くないと確信している。

(神奈川新聞社

統合編集局次長 宮本 敏也)



# 恵比寿さまと祝杯

新年、おめでとうございます。

正月でもボクは、ビールでスタートする。それもめでたい、恵比寿ビールがよろしい。

1887(明治20)年、東京の中小資産家があつまって目黒に、日本麦酒醸造会社を創業。90(明治23)年、「恵比寿ビール」を発売。こんな広告をだした。

「風味を佳美にし殊に滋養分の多き事は殆んど牛乳と」おなじくらい。東洋一と賞賛され、日はまだ浅いが愛用者が急速に増加。毎日、数千ダースを販売。「恐れ多くも宮内省御用品」の榮譽を受け、遠く広東・上海・香港にも輸出しています。

恵比寿とは夷、戎、恵比須とも書いて、七福神のおひとり。七福

神といえば宝船。宝船の研

究者を自認しているボクは、毎年、宝船絵を描いて大阪の堀川戎神社に奉納。

今年で17年目になる。だから、ことしもいい年でありますようにと、恵比寿ビールで祝杯をあげるのである。92(明治25)年、恵比寿

ビールは右の広告をだした。「宮内省御用」「恵比寿ビールは誠に目出鯛縁起好き飲料なり」「紳士諸君 恵比寿ビールを飲んで 長寿を求め賜へ」イラストの恵比寿さまも

いいごきげん、だからボクももう一杯。99(明治32)年8月、日本麦酒

は東京・銀座に、初めてのビアホール「恵比寿ビール Beer Hall」を開いた。左図は開店当日の広告。



高尚優美に一杯売仕候。大方の諸彦賑々敷御光来 恵比須ビールの真味を御賞玩あらんとを願ふ」「売価 半リットル十銭」

1日平均800人の来店。売り上げは130円も。毎日、つとめ帰りに寄る人。マイカップを置いて楽しむ人で大入り満員、客止めするさわぎも。つまみは最初、大根やフキやエビの佃煮だったとか。冬はストープを入れて、客足は減らなかつたという。

日本初のビアホールは65(慶応元)年5月、横浜居留地内に開かれたビア・アンド・コンサート・ホール。また山手の醸造所へフトブルワリーには、ベルヴェユール・ガーデンがあった。(美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住) (図)「恵比寿ビール」1892(明治25)年、「恵比寿ビアホール」1899(明治32)年、いずれも朝日新聞掲載

「今般欧米の風に倣ひ」開店します。「常に新鮮なる樽ビールを氷室に貯蔵いたし置最も